

近世浄土真宗寺院本堂の研究（そのⅦ）

満性寺本堂

岡 野 清

STUDY OF MAIN HALL IN JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART VII)

KIYOSHI OKANO

満性寺本堂 岡崎市菅生町

寺は岡崎市の中心部の乙川堤防下にあつて、市内の貴重な遺構の多くが戦災や三河地震で難を受けている中で免がれ、戦後の伊勢湾台風でも水難に遭遇したが奇しくも事無くすんでいる。岡崎市は元來徳川の城下町で、寺も浄土宗系を始め多く存在するが、浄土真宗系は市内の中心部には殆んどなく、永禄の三河一向一揆で家康を攻めた本願寺派は追放されたが、満性寺は桑子の妙源寺と共にこの地方の数少ない高田派の古刹であるし共に家康に敵対しなかったため、寺域と法灯を守れたのであつた。寺の創立は正応二年(1289)了専上人の代とされるが、その後変遷があり、享和2年(1802)に書かれた「菅生山澄海記」によると、本堂再建は元禄4年(1691)とある(註1)。他にも元和5年(1619)説があるが(註2)、様式的にみても元禄説の方が確かである。寺はかつては末寺と付近に多くの塔頭を持ち、一山の様相を呈していた。明治に河川巾改修があり境内南部を失つた。本堂は東面し、本堂の他に庫裡、諸書院、太子堂、経堂、鐘樓門等がある。

堂の規模は桁行7間(実長10間余)、梁間8間(実長8.5間)、寄棟造本瓦葺(一部取替部分は棧瓦)で、東面し、北側の庫裡との中間に玄関を入れて繋いでいる。本堂の正面中央に1間の向拝がつき、前面にのみ縁を設け、和様高欄をつける(写真1)。

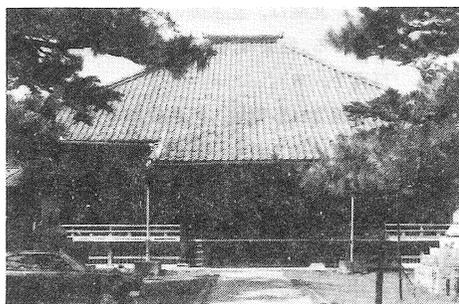


写真1 堂正面

堂内は前1間巾通りと南1間巾通りを入側とし、次の前からの4間通りまでを外陣とするが、その内の奥1間を矢来内とする。更に奥3間通りまでの中央の見付3間(実長4間)巾を内陣とし、その両脇の見付実長2間巾はそれぞれ南北余間で、余間の北側には見付実長1間半の飛檐間がつく。各余間の背面に奥行半間巾の仏壇が張り出し、内陣奥にも奥行1間の張出しがつき、それを桁行に3分して、両脇に設けた仏壇を脇仏壇とし、中央間には後端に引違戸をつけて後堂へ出る後門とする。両脇仏壇前列の内側柱より半間前に来迎柱を立て、来迎壁を張り、その前に禅宗様須弥壇を置く(図1)。

向拝は見付1間(実長3間)で型の如くで、礎盤を造り出した上に几帳面取角柱(杵卷付)に虹梁を架け、左右に獅子頭彫の木鼻をつけ、柱上連三斗、実肘木で桁を受け、中備には竜の彫刻を置き、身舎と繫虹梁で結び、軒は1軒半繁極木である。濡縁へ昇る木階3級(登高欄付)を設ける(写真4)。

柱は内陣廻りは円柱、その他は総て面取角柱である。堂外廻りの前面では縁長押、敷鴨居に内法長押を通して小壁に飾貫を入れるが(写真2)、中央間では長押を用いずに内法を一段高くして差鴨居を入れ、その上に鴨居を3分する位置に束を立て、その間に欄間障子を入れる(写真2)。南側面では中敷居を入れて縁を設けない。但し南側面前より3間までには別棟が接続して(後補)入側より出入し、表入側の北妻にも戸口を設けて庫裡に通ずる。それより西の北側面では総て中敷居を付す。鴨居上は内法長押を正面中央間を除いて正側面にまわし、長押上飾り貫1本を見せる。軒は二軒半繁極木、敷居下は地盤まで豎板を張る。背面は下見板張りである。

内部入側外陣境では、正面中央間を広くとって一段高く虹梁を入れて両端を差肘木の斗で支え、その北では側柱までを3分し、南では広縁までを2分するように柱を立てて無目敷鴨居に内法長押を通して長押上は飾貫1本

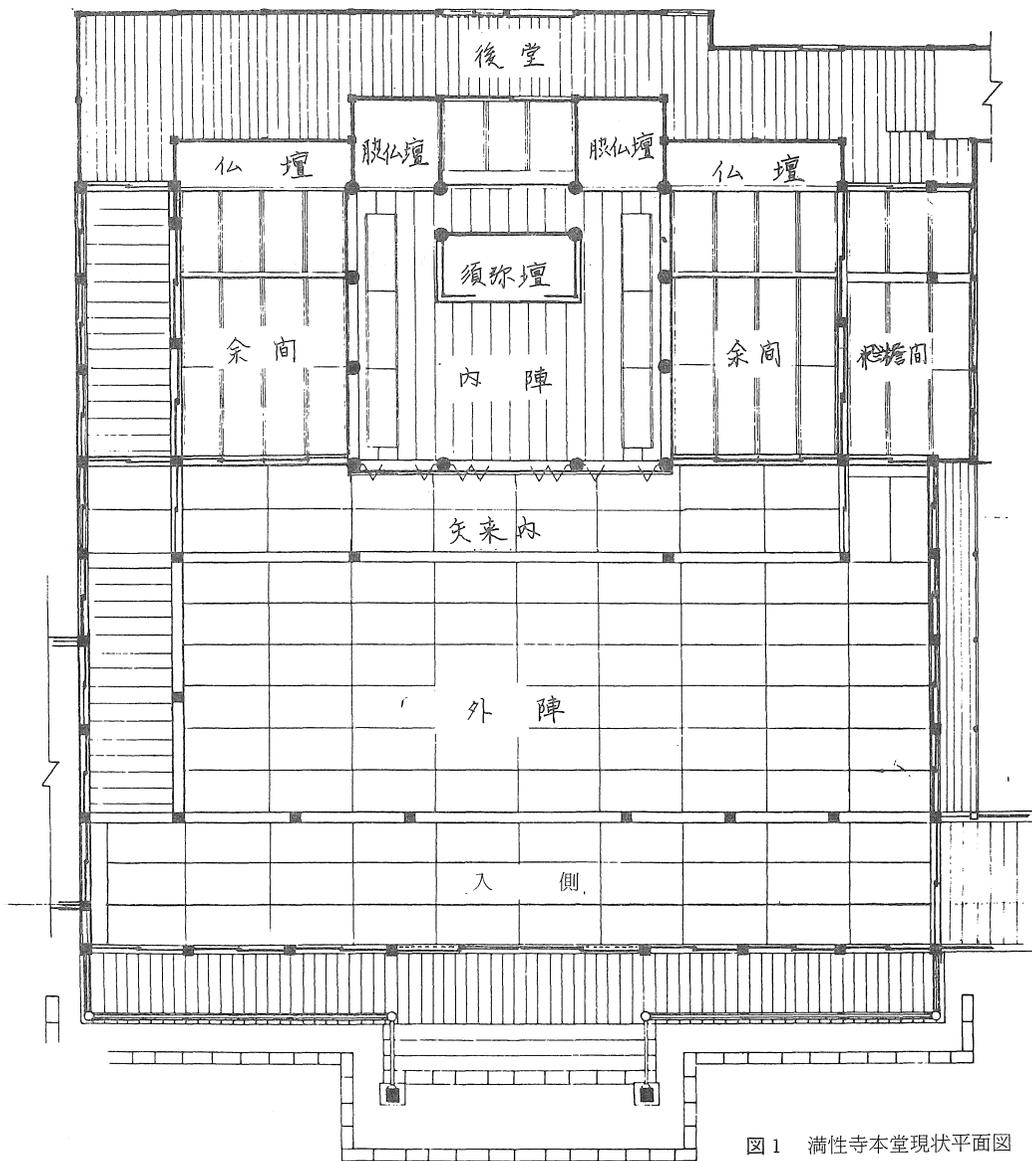


図1 満性寺本堂現状平面図

を見せた小壁とする（写真6）。従ってこの堂は左右非対称で然もこの筋の柱は側柱とも内陣柱とも筋が通らない。外側建具は、正面では中央間は2本溝で舞良戸4枚、その裏に付溝をして腰高ガラス障子2枚をはめ、他は鴨居上に内法長押を付し、腰高ガラス障子引違いとして、北側の庫裡への通路と南側の別堂への入口は板戸引違い、他の側面はガラス戸引違いとする。内法長押上は小壁とし、天井は長手方向の棹縁天井である（写真5、6）。外陣後端の矢来内との境では、内陣と余間境の柱筋に応じて柱が立ち、中央間は4間スパンの大虹梁を架け、両端の持送りには両脇間に架けたスパン2間の虹梁鼻を柱

外に出した木鼻を利用し、脇間虹梁の他端は南は入側境に立つ柱で受け、北端は、北余間の前隅柱の前1間の位置に立つ柱で受ける。虹梁は黒漆塗りにし、絵様を金箔押しで飾る（写真7、8）。

矢来内の南北両妻は敷鴨居、内法長押を入れて太い格子の格子戸を引違いに入れる（写真7）。又矢来上の中央柱間の柱上部の天井に接する部分には無目を通す（写真8）。又外陣床は畳敷き、矢来内は外陣より敷居1段畳敷きの床が上り、天井は外陣、矢来内とも桁行に棹の通る棹縁天井である。

内陣余間は更に床が一段上がるが、両余間の後方1間で

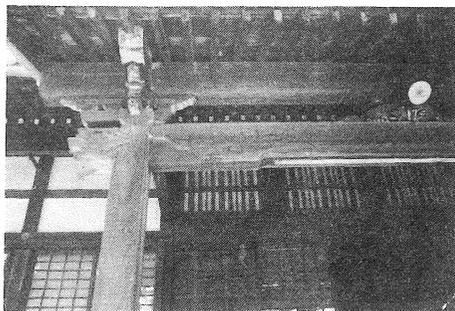


写真2 向拜上部

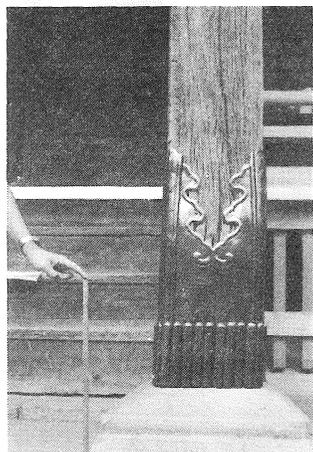


写真3 向拜柱下部

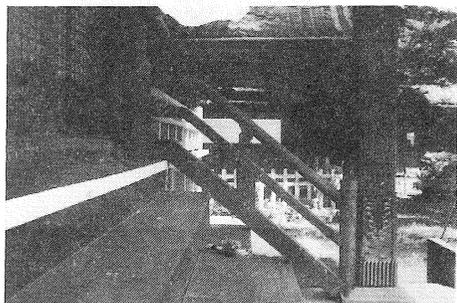


写真4 正面登高欄

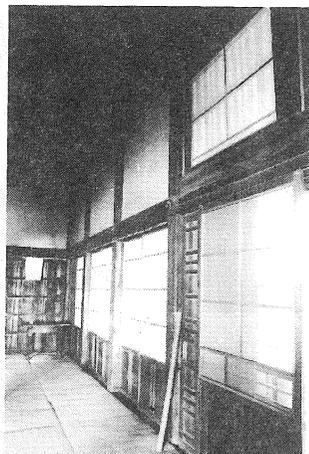


写真5 前面入側見返り

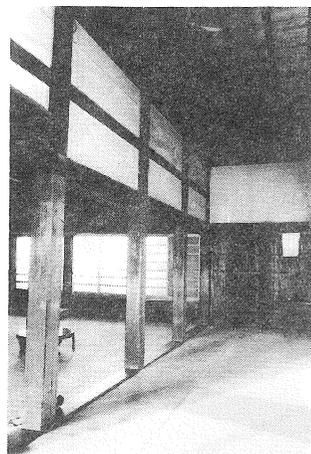


写真6 下陣正面入口

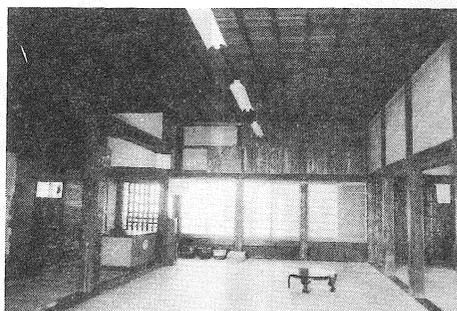


写真7 下陣全景



写真8 矢来内境上部

は余間前端よりも更に框一段上り、余間は総て畳敷き、天井は棹が桁行に通る棹縁天井とする（写真9, 10, 15）。

内陣廻り柱と来迎柱は、円柱上部粽付で、両余間との境及び外陣境、両脇仏壇前から来迎柱へと、来迎柱と結ぶ内陣周囲の総ての円主を結んで頭貫、台輪を廻らし、出組斗拱を詰組に載せ、内陣の外陣及び余間との境には、頭貫下に絵入板小壁を張って無目の差鴨居と敷居を入れ、内法は開放し（写真9, 11, 12）、内陣前の柱列の矢来側でも、余間との境の余間側でも同様とし、内陣前には巻障子を釣る（写真13）。なお、内陣前面の4本の円柱列は余間前端の柱筋よりやや前方にはみ出しており、両者の柱筋

にややくい違いがあり、内陣前面両端から左右に出した木鼻は余間前頭貫の前に出ている（写真13, 14）。又余間間の間仕切りは柳障子4枚を引違いに引く。又この間でも中央に束を立て、束上にも柱上同様斗拱を組み、更に中間に詰組斗拱を入れる（写真13）。

内陣脇仏壇前も来迎壁前の須弥壇同様禅宗様仏壇の綫型意匠を採り、内陣天井は折上小組格子天井をしつらえ（来迎柱裏だけは簡略されて棹縁天井を張る）、床は板張りで両側端に置畳を配す（写真11, 16）。



写真9 余間(南)



写真10 余間(北)

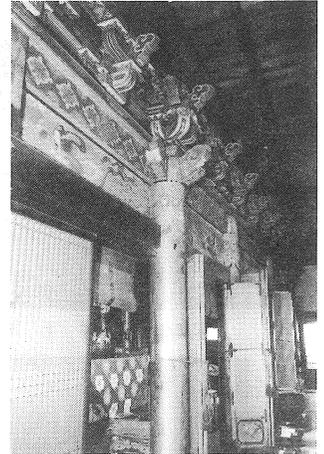


写真13 矢来内の内陣・余間前

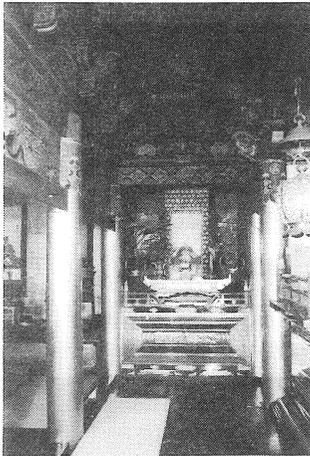


写真11 内陣南脇仏壇

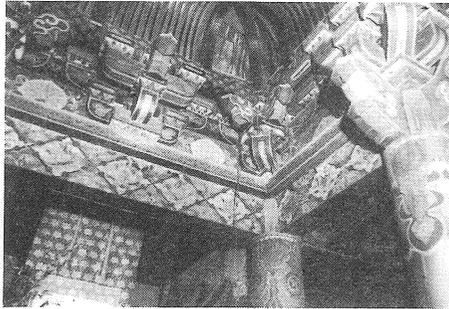


写真12 内陣左脇仏壇前出組斗拱

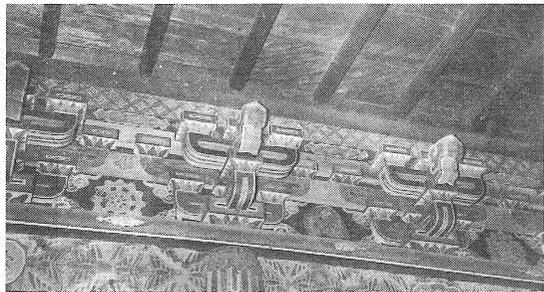


写真15 内陣と余間との境の柱上斗拱(余間側)



写真14 内陣・余間前柱の上部

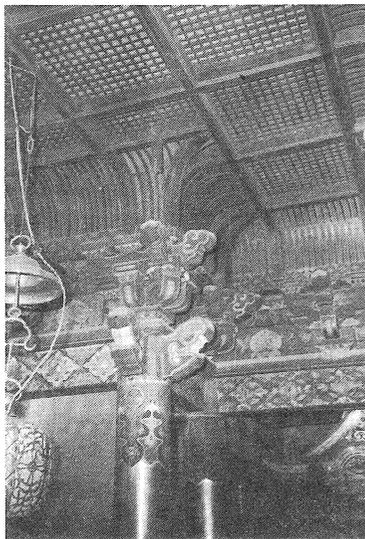


写真16 来迎柱上部

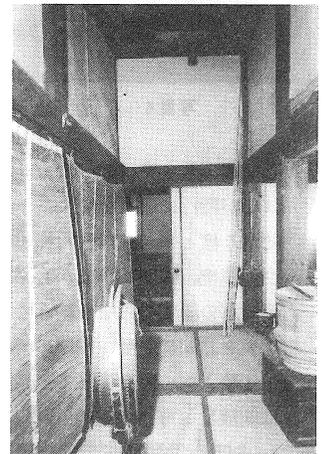


写真17 飛檐の間

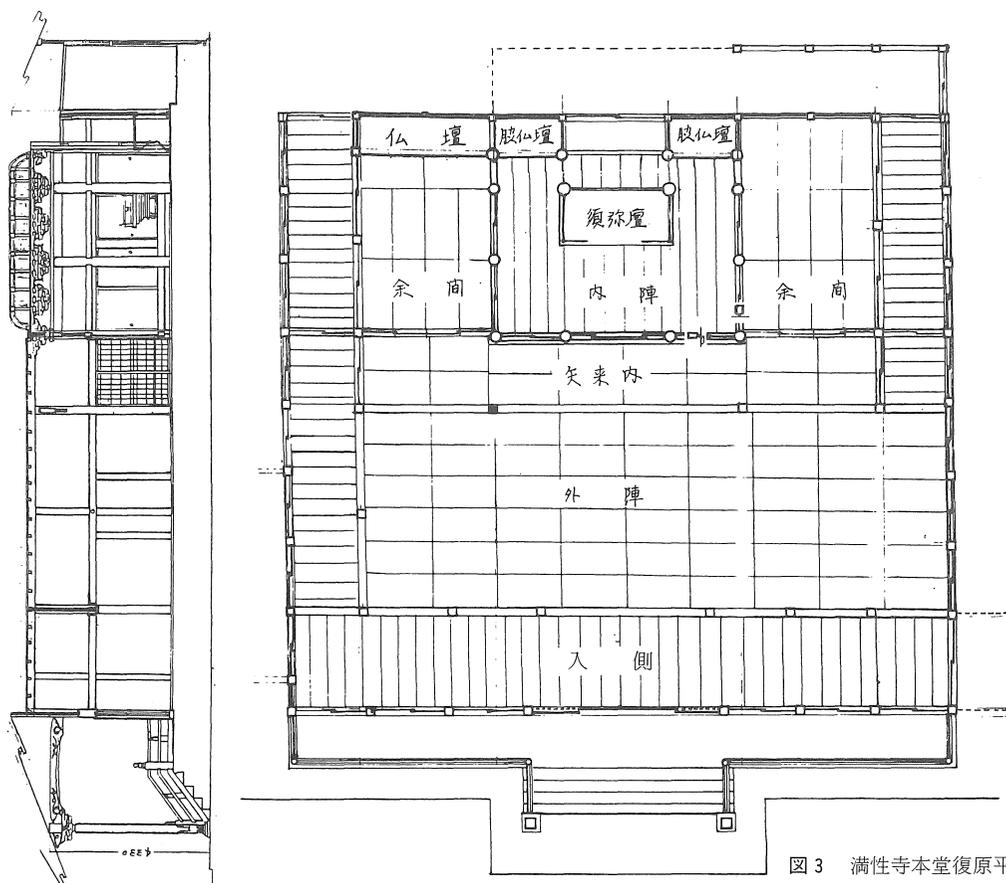


図3 満性寺本堂復原平面図

余間背面にも奥行半間の仏壇を設け（写真9, 10）、前面に虹梁を架け中間に束を立てて小壁とし、天井は棹縁天井を張る。余間の内陣境は内陣内廻り同様挙鼻付三ツ斗拱を結組に配し豪華に飾るが（写真9, 10, 15）、両外側面及び矢来内境は内法長押上を小壁ですませる（写真10）。余間、内陣境には間仕切を設けないが、北飛檐間との境は敷鴨居に2本溝があり、現在簾を垂れてある。飛檐間は式典の際に奏楽の部屋にあてたと言う（写真10, 17）。南入側及び飛檐の間の各前の戸締りには杉戸を、西裏端は各々襖を引違いに入れる。両室とも天井は棹縁天井とする。

現状は以上の通りであるがこれを復原すると、先ず現在上段になっている内陣余間及び矢来内の床は寸法計算上は敷居一段分内陣が高くなるが、ほど外陣床の高さに下る。これについては内陣床が持ち上げられた際に須弥壇も一諸に持ち上げられたために来迎柱に旧須弥壇の取付痕跡があり、又余間仏壇の高さが極端に低いことからわかる。両脇仏壇前列の円柱4本は後出のように内陣が後ろへ拡張された時に動いているが、南脇仏壇の2本

には痕跡は認められないもの、北脇仏壇両側の円柱には現在の高さの下方にもと脇仏壇の取付跡の前端が認められる。

現在内陣前及び側面の敷鴨居は無目であるが、側面では溝が巧妙に埋められていて、もとは両側面と前端通り3間には（今溝は板を打って隠されている）、引違いの柳格子でも入っていたものと思われる。尚この埋木された敷居は床が落ちていた時にはそのまま浄土宗本堂に見るように結界として使われていたもので（内陣両側面の後端の間各1間には、結界があったかどうかは不明）、結界と床の間は羽目板で仕切られたことが、現在内陣前面にそのまま残されていることから解る。現在はその前面にのみ真宗寺院内陣前面の形をつくるため、長押を取付けている。

矢来内の床が敷居一段分下がっていたことは内陣前端の地長押が畳下に下がって取付けてあり、元は床板が一段低く張ってあったことわかる。

次に南余間仏壇の前南柱の北側に壁の取付痕跡があるので、この通りで余間が終っていたことがわかるが、そ

の半間前の柱には仏壇框の取付痕跡があるので、元の仏壇は現在より半間前に出ていたことがわかる。これに対向する内陣側の丸柱は後補材であるので痕跡はない。現在仏壇上にある虹梁も元は半間前の位置に取付いていた痕跡も下部を切り取られた柱上部に残っている。これに対し北余間の仏壇前の虹梁は新しく、その北側の柱には内法貫や内法長押の取付痕跡があるので、現在の虹梁は取れて、その下方に鴨居や内法長押が廻り、仏壇も取れて、北余間は12帖の座敷になっていたと判断される。このことは図3で示す通り南余間と入側境では中央に柱が立つが、北余間と飛檐間境では3間スパンの中央に柱が立っていることを見ても肯ける。又北の飛檐間の北側半間通りは後補で、その分だけ拡張した際に切断した柱が束となって東より1間の位置に見られ、北側より半間通りに元小壁が附いており、元は1間巾の入側になっていたことが柱の外側が風喰していることからみても分る(図2)。

尚この部分の拡張や後堂を1間後へ拡張した事を記録する安政3年の棟札が寺に保存されている(註2, 3)。又現来迎柱及び須弥壇ももとは半間前に置かれていた。このことは現床板のもと柱あと及び須弥壇前端の位置を示す塗り跡が半間前にあることから確認される。然し内陣両側面の奥の間の敷、鴨居にも溝を埋めた跡があることを見ると、改造は内陣及び余間を後半間拡張して引違い建具を入れて使用して後に更めて内陣、両余間及び矢来内の床をそれぞれ上げたことがわかるが、何時ごろ行なったかは不明である。

尚更にうがった見方をすれば、両余間と矢来内境の仕切りが内陣前と通りが揃わず喰違っていること、矢来内、外陣の仕切りの虹梁と向拝の虹梁の渦が同型であるところから同時に後補を受けたとも考えられ、又正面両脇の各3間に中敷居の跡があることから、濡縁も後補である疑いが持たれるが、それらの判断は今後の考察に待ちたい。

このように復原してみると、この本堂も完成された本願寺系の浄土真宗寺院とは異なり、むしろ浄土宗系の本堂の形態に類似してくる。また黒田の浄光寺同様江戸時代中期の高田派寺院本堂の形態として、外陣の奥行きは浅く、入側を室内に取り込み、外陣を左右に3分する柱列もなく、矢来内も未成熟で、床高が内外陣ともほぼ同一であることを示す一資料を提供する次第である。

尚この堂は柱筋が殆んど通らず、又左右対象でない点に問題もあるが、数少ない高田派寺院本堂として注目される遺構である。

(註1) 本堂再興。十八代舜嘗。元禄四未正月。享保二戌年迄九百十一年。

(註2) 同じ澄海の編纂した「当山代々并寄附」には次の記事がある。

十五(代) 寂無 寛永十五寅九月十四日寂。本堂再建。元和五未三月廿八日。文化十年迄九百十五年ニナル。

(中略)

十八(代) 正定院舜嘗。享保十九寅二月二日寂。本堂再興。元禄四未正月。

なおこの欄外に青字で(本文は黒字) 次の註記がある。

本堂再興。中興可仰。前本堂ハ青野村本光寺へ譲ル。梵竜代再興シテ今ハ座敷トナル也

この件につき青野本光寺について調査したところ、そのようなものは存在していなかった。

(註3) 本堂地揚、諸修覆。当山廿五世離垢眼院殿光卿上人代。卯春企相成同七月ヨリ地築。辰從九月二日六日迄入仏供養会執行。維時安政三丙辰歳。本堂後方江六間四尺引、右柱口八拾本石二而積上、中門内四尺余地揚。後堂新再興三尺五寸広。奏楽場新造作。位牌堂四尺石二而積上、内陣丸柱想金塗直し、角柱長押花塗相成ル。是迄平棟柳下本棟新造作。玄関新規造営。中門表式尺余地揚之夏。

(下略)